千社の名和武連

初へん

上

へ13
3167
1

へ13
3167
1

昭和九年九月二八日
購求

詰碁塩之内詰序

室牛の茶屋麹町の舟主の深き
釣瓶縄長き舟
りゝは
幾代重ね掉
舟の客数玉
舟の舳の紙粉
舟板八畳と
ぬ末の恵
の称

但し丹芳し久群集とそこの新
外屋の西方にかゝる柘子の栗
笠屋ゝ苔愛切の寺地の五色
賣込軍〻午黄圓の功能まで
高嶋まる駄賃ひまもきゝ次
姫之内詣の駕富と松さる頭

同の揮耳やうに海しかるの葦錐
をかゞ乳釜欣皮迫の朱盃れし
鬼子丹歩う河運ぬ高祖大士の
庵ら治茅きこの参。故弁天の伊勢
八が信あ杉だ弔も徒市まゝ。
業ゞ法けゝ教乳ゝ題向茅茅へ

百度中の里とて。大願成就少し
おぼしけるまでは。上二高賢の利益
あらん事は。疑ひなきものなり

十返舎一九誌

附言

予ゝ著書を徐栗元の著作なりと京
大阪および西国にまでも運ー馬こゝにて年
来曾路續七編より引ける事ハ
勢土産大師知ぬ六部こゝ諸国
稼とこゝろ紙て書株出の門徒とゝいるこゝて
著書をいでも徐栗元の糟粕中ー
出ることも闕編雑記ケ若弟ケ
ものしりこゝ新編四あるこゝ
急迫ようこゝ時出株の
君まこゝ後ー久足新

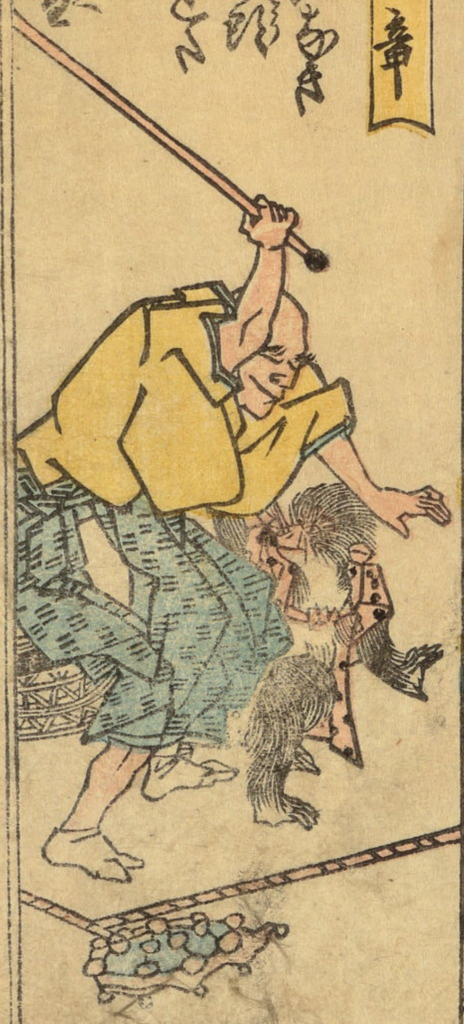
十返舎一九再識

第一章

第二章

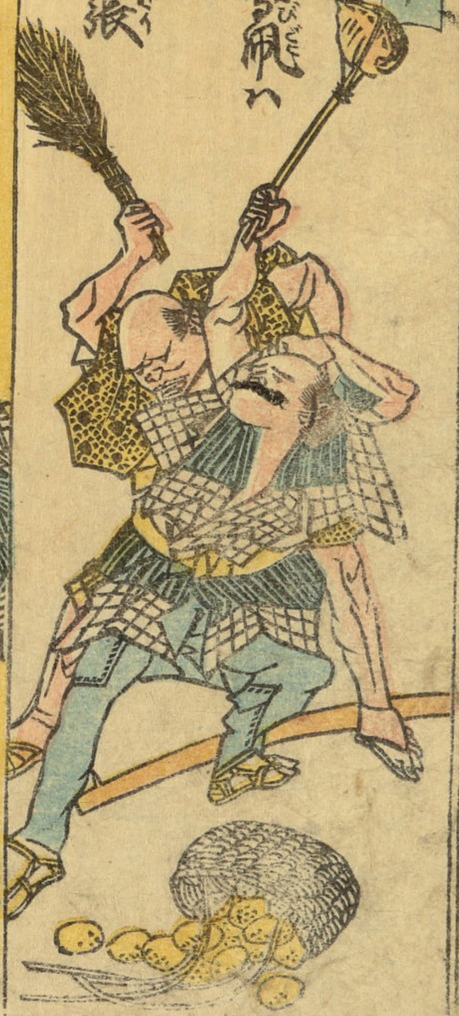
第三章

第四章



第五章

鳥の糞いとうつくしき飛わ
然願の千枚張



第六章

長き瀬の女郎蜘
そもうつくしんぐ
黄金の瀬

第七章

出雲国の奇特
仏と麦飯乃
ばんし場

右場之内結び先達而版元かゝ看板さし
出し置人所作者度しゝ茅迷紙
延川ならびに富手場の内より雑目が谷鬼子母神
そまとよく王子稲荷まで記行山まく積と出来
東作者例のあまけの丸て増内ゝさぶ此編

三冊中ごろ仕入数百あるべし聊か申人後編来子春太郎
何卒ひろく扱うと上申求るまま偽作到仕度とのこと

奉常上

誹語堀之内詣後編　来子春出版　全三冊

雜司ヶ谷記行　版元

讃岐さぬきの敵世中貧福論　十返舎一九編　全三冊　先達而出来

浮世道中膝人宮ほか浅草ほか一夜禅師の門松を宝達の詩の一句を借て茶
十返舎一九著　のかりかたとの中花と共ト名付

誹語堀之内詣上之巻

東都　十返舎一九著

第一章

玉川の黏銀泥の色をあらため成子の凡金色の光を放ち
大覺世尊の正法輝く。法花弘通の時なるか。今東武
堀の内に靈跡ある。祖師日蓮大菩薩宗門の本尊
として。道徳自在妙用不思議の奇驗まことにあらわ。

末世の衆生利益と号り。唖俄に聲色をはつし。聾
たちまち雷に驚き。盲坊なる目をあきて兩親にもむ
かひ。是はおそろにおかゝさまとゝ。初對面の様
子するも。その悪魔のありがたさ。次第に流布しく
四ツ谷街道の賑ひ。附焼團子のしのをひく。往来
の馬の糞も。すくひとる世の人る鮑の貝のかく法花ちる
擦さらそ。他宗のものも。南無妙法蓮陀佛の声混
雜して。淀でしの水車にひとしく。ゆれてん廻る。百
度参のさしかゝりて。金鍔の朝参とへ。此祖師の変
なりける。こゝに神田の八丁堀に。弥次郎兵衛といへるひとり
もの。宗家の佐次兵衛といふよりの。此宗門の信者なれば。
一日の藤をたつに立出て。かうじ町どをりをまいすぐに。
四ツ谷御門と出。すぐ此所の茶みせによりてやすらひ
けるに。そこの亭三十あまりの茶すく人らしき男。ぎんてうあのんきりぬの紙
きて。おぶさの茶けらびまとひつけ。おそろりのすまらしき
男におそそのふろしたづさへさせて
なろうきうらりおまゝく此茶やへきたる
「ござりまするも。おさそいござり
ますと ちやゝとらんで出るを この男名へ様七
「たあさんたのんで天気じやのアツとゝ

かうぢうにあついは茶ごゝろんなに不満さぞといふ、と紙。ヱヽまことに骨董
な。コウ気があるならばそらんそら経へ。そしてその茶碗らの壺
子を二三本らんな。茶釜もまたあろ「一本持ら出しやせう
「茶でせけど紙させるかなり。おんでがわるいでいゝやれ
せるな「ホンニあそこが経つてみるうち。茶碗してあとおりやう。
コリヤおあさん。きのふかいておみさのぶ茶「土おまへさん。き
のふせうりのをあげるりのうへ「そんならうちらさのべ
「それはおとらぬら。さうれおとうる。せうくさのべはさりやきア

「まんのるゆぐ。ごんそうて喰ねえ大きなもやらふう トいふ内太が二ひき尾
をふりてふるとき「こりやくるめえふせる茶へ。ヨんとふく「太「こんく「ウヽ
せるぞ。ヱヽ茶器用な畜生めだ。孫の方に女ぶぞ茶へて太
でも女へせんぞ。おやア経へらもヨと足に出るそ トあけて出ると。女夫ろくと入ル
きる女男大犬上にかゝつて女夫ともかゝゑ「キヤアン「ヱヽせつましいせんらゞ ト太をおりなさけちらる
おふりかへりてといつさまにかゝりけれバそれをおびのくひ骨しにそをの「アイタゝゝあつい
せうぎるとしをうけてあつさうしあゝらひのあしとふむと
コリヤ猫のせる ト此お猪はきげんとみへて。おあたゆそだとのでくあのすぶろう同をむき出してそうそをほうあろ此男むかふ見さきとみへて「猫ゝ
きるとくはころちがるふ声せしと「ぎふえくさとりめてんがある

愚舎一得

ざるい。おのを信の足をなぎふんごろふんごろかん
ふーなる足ぞをあどでべドのぼすーっ。ふろ釜をとんで。
ぞまろてちをさなさるまべいふ「イやこらろ巫言ぬるもとな。
町人ふおーとふまれて。身どもそろろでまもさざとこへ
なるーるなんでトまろろよなろてんーるとたてむろ巨くなるる。「はるもで
ござるかと早壹あるとがけ男ふ。あーとふまれこあのひ
なさるかーっ。お猿ぐ立やせうぐ。十二ふんごのどやアござる
やせん。けー男のあのあるこ。あるこのおあぶりどろうんごので

ござるかと「いるさる。お身ぐそんらくどそこもあ。身ども
第刀もせる身ぶんご。町家のりのふ巨と踊きこへまもま
ない。コリやなるわと身どものぐむどろうんごのであるーさと
「さあるーく先あるこのぢ機嫌ぐおとろてありがてくくくく
時ふ点七りふ出かけかるる「おりーるくも極くまなぢ巨
ふごこそそとるで一ふ屋ふかるる巨やせう「コリやお身ども
酒がなるる「飯ようさときござるかと「それくらいの
ごんぞ身どもこるふ吸筒をりんてある中野ぞるこそふる。

身どもらてらて好物ぢゃ。酒といよりのへおがなくてん
がいふのあるぞ。ナントらでひとろ呑でらごろ「コリヤようム
ござりやせう。ちっとえ呑うござり呑とそれど。せっうくそよム
らへなさるりのと。そのうへと。者へっろちゃ。フット奇妙ごむうム
ふさのふっあるそふぞ。トさぐるよかけ出してむうムの居酒やゆき。「コリヤ
よかっすぐ。ぞしちんたあどの。人せ紙ふさげてもよっム
らっどろ「ナニサようムござり申さと。お媚をしてあげませうっ
「イヤそれもふへおよそだね。サア歪もちてふある。トたひとろ紙ふつ
ふ〳〵トもりよさぐきどっきっけ出ぞ「さ呑うなっろっちっろ
ぐんせろておりっうぐき
「おそ呑〳〵らそそ〳〵トつぎのめりよがれさきろ「ヲトミミあり
呑とく〳〵。コリヤふと猿の出縁で。おなるこの出酒をいっぐ呑と
トいっとちのミて「やア〳〵。コリヤすんでござり呑と「なんでとんでござ
「酒ぢゃア。ござりやせん「さふ酒でなくて「そまでそ酒ぢゃア
ござりやせん。コウ虎ぞ。まめひとくちのんでみや「ドんく
ぐ〳〵。ぺっぺっ〳〵「なんざあっとん解せなへトさぐきとそのついでひとくちのそ

「ホンニ」あるべく。アヽよわるてゝぐある。身どもがいふ酒をすえて。皆用とりつて出ると。有うけのんで去まへだとゆへおろ
うい性ぶんぐふよつて。今軽妻ぐやとゆへおもへいつでも
他ぶ出ると屠るとれつきとれて後の有きりのんで去
まつてござるうぷくへ出ぐけれ内でのんで乃でハけ色て
のせねぐよいとりよふよつて。ふうらべとて名ぐ宿えで
のんどふどふかをうれ辞とたつて。サア是うら場の内
ごとりつて妻ぐとりる。イヤくいろ組べなるうきへ変理
やうふ出ろけよいとする。そこで妻ぐそん。分り後せ
りつてござうまとる。賽銭だうでいけとらく。イヽきそれ
でハなうるうきとおやくだるとと。せごこんぐきいろてそん
なうけ吸銭へ酒とへあげるうう。場の内へゆくまでん
まいうきのでゝ。屠りまるふ。これとのんでかへもとへをてよ
さぶけうへ酒と呑ぐうう場ぐあるまいと。ぐこあるとなて。
よとあつこりんとうえる。ハヽヽ「イヤ変ひごとやうでござり
やせん。ろうく呑のとおりて。着山でさうよせるりのと。

コリヤ麻布なりそうぐ。えさせ。らひかぐんふまとまべ
いふ。あのお結さるふかうてぱ。ぱきう和(わふあつこ。くと
つけあとこ。イヤりく。一言も内儀彩者。ホニ馬ぐその
せうなわふあつこまこさが和(わ。ひさ一分を乗うけあもする
わく。ヨウ亀や。向くへいうて三三合とうてきそうト銀一分わうき
そうこあけ出して。エて明ぐぐびくする。紀つぐふるりくの酒
と丹つ巳和(わ。法いでらうや。ヨットよりく。ぐわんうい酒
いよ格別おりのぐさく。チト出あいがらうるいを。ひ一ひ

そうそれぐとうて。こをぐこ。ようくらをまどとりのう。おもひひう
おそろしいぴとうあげやきうう。ここれい通ひうでけぐ。
ヨットくうきいく。ぐぐちんの酒田のかうりてくうくく。ヲ
人のさけでそうををらう。あつかまいなんとうをこもよ。
とてものるふかうるませぐとう。アコラくとんぐこと紀ひひおう
トおりふひうこうぐ。えみのんでーまひ。アいく。ふ拍ふなうこ。ぐ。ぐも今きとこ
わうこあい。たうぐう猪ふふ。ふ在ふよ。ふ人の酒とのんで。礼
もいうぐぐふ。たう和(わ。ぐう。ぐ。のつ。ぐ。イヤ紀ひひおう。たぐ

梅きりや一河
茶の風
茶の風
一都
一ぜんめし
ちりの音

いふくらいのまぶ。きさうもちの酒と。身どものんでくたい。
アリヤ身どもの口へ。そのさくアみの酒が。むぐらうんざのであら
ざどいふ〳〵〳〵〳〵〳〵「注」ヨイ。あのーろくも紹へ。サア荒七出うけ。ガうト
けやさうの口でも。おさふ〳〵ひいそこおたれ。たうたれ。たうたれ。ア
ガうもたなんびあり。ろ京おもひども。長ガもと〳〵〳〵〳〵て「アイ」お世うふなうり
ゆう〳〵ト。ちや代ときこひそれうたんゆうさうる
どどうすぐれたどうゆうさうる

第二章

世界の親父の店風
義用のあのね仏世〻

かくて四ツ谷の町をたどりゆけば

なぐらゆくどきけがあらうがあの「やしく」お祖師さまのお蔭で。ぱかり十日八
ぐらうりとさきうやおまう

拵ふぐさのふおくまさん「さかうとも。ふうげで気が延くくと
ちやぐ。ポンニヨ(と)なぞ。門ふみるとぴりくうる世をろ
ちやぐござうやせん。はな知のとそり。アく血のたどのぱ。年
中あこ年がおりいの尻ぐらこのくらうて。百で買くさること
るかうふぐろまくくと称てだろうろ。そをふ吸まる世人。年月ろ
産月ごとうふ。縁組ぐ一まいこーらてござうやせんな。
それでヨ(と)ぷ。あつちろちーて。ちめもうんとあるぶらと。

たゝしておきやとやう。けあのごも隣裏の大屋さんのおくさ
んぶ。湯紙とりつて来て下さうこうう。すぐふむうの来
屋で。藺と一まいりゝこい中そ。ちやんとその湯紙をぞちつけ
てやつて。さあとうくうう紙をるりのごと。あもも三のいう
紙くりのごうう。巳がかんでらてゐるやうふ。おゝくて来て巳
中くぶ。そうまるときのゝの咲ごこ。うゝの赤おあがる紙
うむとうて。辞狂らゝい。どなりのたげつてうどのぶ。時地へ。
小屋とうけて来のなんのとうるぞ紙まるとう。巳ぶとあ

血のゝちどのが。嫁なせゝな。かるいそゝめあの赤あへ。絵も
まぐまるくを赤ちやあるくめ。さいるるのがあるやや
さとと。せろうくゝらくて来ゝるその藺を。ちやんとあふ巳
て。蘆中くらる。だろくしの一ヨかゝゝ巳ゝ中ゝ嫁の世絵へ
ぐざりや せんぶそのかるう。親父どの〳〵戯氣めくこうゝて
中と。嫁てらんな せゝ。あのとゝふなつて後生へ親つぐ。お
歌国ろ きゝひで。あけてもくをても教生ごこ。毎晩魚
を絵て来て。ろゝの二百ろくのゝ。三百あつるのとゝ。ひらく

さて孫まつる事を。さぞかし殊勝なれども。美味そうなれば。その親のにくさうも根性ぶきと孫へうつり。有難へうつりたれど。蓋し一本も臣。ホンニ業俗でるりやせんそれぞうりの穀出す紙丹あて。死んだ子の為ホ。お影用でも唱へて。あり〳〵お祖師さまも。あれ糸ちさせんと。弟子しても。糠ゆ釘。どんぞけあいぞかも。大臣さるや。おむつ人の勧きさるお。お母屋の乳をたのんで。釈又ホ弟子して。世ひやせうとありひ丹をうあるこのこ中丹をとトりよと大臣いりやりよ

ありの人のとこのちう弟さんの穀出す人。世間の人のさること。お願ともらひや世ぞが。ヨーガホの生辞とのゆこきうえて丹をとどこのらふくうりよ七年でござう丹をとが。それで町内の鳥ゑるどのくちを。そのしてを弟がうひさ。ホンニあんまりぞうう小言ばいつとひ業ホたろてある臣ホ。ゆけといひ丹をとへる。ツリやりよおりの人のまんぞ。ゑ年業もあることるう。ちうもうんなおけんつうでんあるめて。そ時ん中ゆへ色も白ろうう。お願ろうちもありやせうが。ぼん

年あらの見づくしで。こんなふうちくまがし。[illegible]
[illegible]がこゝまで。出来てあるものを。今どこいうまるものを。
あんゆく後ぐろとしろちやゝどざりやせん[illegible]
[illegible]ちくしく今ひろ〳〵ホンニどこの親父くちも。[illegible]四ガうるくゆやゝ
のたくあやん
あやまりまを。ろうちぶのみ。[illegible]ぶうをちぶを愛て
うんゐせ。搾摘〳〵行足〳〵[illegible]迄で居なぐう。けあいぐも関又
さんとかうのゆゆ。菜番ぐあるうて。ろしおりくぐもうて
ゐなさる。ろうちぶゆく[illegible]ある。眼玉の大きな膏薬やの[illegible]

とうくよ。あまとふうりで。聾や娘のまゆくもかまいぐと。
二潜くあぐうて。[illegible]ゆうまとゆうう。梅川忠兵衛の在行を
まるうろて。いうのまふゆう。お[illegible]ぐ狂ひのけこうくく
ゆうる。[illegible]の第とちめて。女形ふなるとさ。ホンニ[illegible]
気のさこどやゝどざりやせん。大在さんのおだあさうゐも
爰ふゐなさるぐ。まご[illegible]弘月うう。店賃もあげ[illegible]で。
そこゆどやゝどざりやせんうな。それでもこけくこれうう。
あくうふちゆうぐとゆのでくさうゐゆ[illegible]ゆ[illegible]

五返舎
半九

あまでもてんく根性骨のふとい人でいろちやァござり
やせん。それからみんちやァ。おまへさんの本のかゝさま
さんハ。結構でござりますと。のふさんちやき屋のおかみさんト
「りやうどうちきやの女房」さまう〻ハ。あのさまハおそしようて後世のことも
構ハず。殺生なさるをみるしハヽ。おそろしくおもつてぞろ
すきとおぜとらふ。てゝてがおの親父どのハおんまり後生
を願ひもどして。身上の障りになりますと。おんふ歴々の
和尚さまがたの方ふ。あさも晩も。お使くあの者さ。

斎堂の棚へあげて。日がな一にち仏ぞでうにかゝつて居て
なまくえ出家に出てみるまゝる時。客人が来て。是ハいゝ
ごといふと八兵衛が。ハイそれハ。八貝みらんでござりますとと。
いふを聞て親父のひやうさぐとのが。ヨリヤ八兵衛。あれハ
元壺がみゑにつゝてゐるふ。三貝下のひゝよりをねかまへ
勿体ない。又飛ともう蜆貝ともうの肉にも。嘘をはく
ごゝの仏さまが。一ぺんずけに織のへ。それまでどうら夜にも後
とつくな。もし只今倅が八貝みらんとやくえ納。あてゝの事へ。

みるみるうでござりまさと。ぞんぞあきなひふけちとうまて
うりまさねうう。ぞうぶりよゆへこおまへ。はまうあんへ。
商人ぶ利ふをうう稼へで今月ぶたちまさとう。いくぞう商
賣の邪ア をさきかまとりくと。稼をたて。てれ文かうい
や。邪欲のさあふ。俗かざるい無量の業人。学文とかうハ
志稼へでも。ふさへまこと高れべ。ふさるふかるるへ親へ。
こうく後世の一大事ぶ行ふ。商ふへさとも嘆ぶつくな。
一文でも邪をとるおと。遠方もまいゆをうう。まうく

息子ぶ俗ぶうこと銭金式。つうこ出て云ふのこふまれちし
て志ふこまとうう。けるも紀類ぶ。邪文と種家
軍へでも入金て。仕後事業をさきぬかうふ。志こぶうふて
いられまとぶ。うう邪ぶあてそのもうまとまへくう。うへい
お祖師さるへ。お母ぢの後生邪へかまとかうあと。邪ぶ
ふまるのでござうまと。それうう人ちやア。志うう云ふ。うるの
教生ずとぶ。猪向ま！でござうまと。
仕安 ト 仕そまま！の内をあくも大事ま へ きうるうふ邪ふへあとうのふい
なるねど世界いさるへぐ。姫のるをとうるくうへぶ。あうう

まくのたあさ日うち。ちやぢの日んざんこゝめづらしい。こゝまふ
むうふく。ねのうきうこふうのあ合ぐ。おりーろそふ水ちゆきて
いく。さうゝべ見うまこ。あの多合のたなーと愛まをうト

仏なてあづ色とかけ
ぬみてこゝをゆゝ

誹諧堀之内詣上之巻終

みのこーテレッツ世ゝな
吉佐博物場へ参べし